

昭和五十五年五月十八日 ご講演（無題）

ただいまご紹介頂きました大森曹玄でございます。私は京都の花園大学という禅宗の大学の学長をしております。私も授業を持っておりまして、四科目教養課程を受けております。一回生・二回生・三回生ぐらゐまでに建学の精神を持ち込むということでは学長の傍ら教授として教養課程を持っております。若い諸君と月・火・水・木と四日間一緒に暮らしているわけです。こちらにも前にご厄介になったことがあります。今、寺山さんがやっているように、座禅のお相手をしてまいりました。

ポールディングが『二十世紀の意味』で指摘した「四つの落とし穴」——その第四の「人間の素質」の問題

さて今から十余年ほど前でしようか、一九六四、五年頃にアメリカのポールディングという経済学者が『二十世紀の意味』という本を書きました。そして、その後日本にまいりまして、日本の主要都市で、その主旨を講演して廻りました。その書物にも、その時のその博士の講演

にも、我々が二十一世紀を迎えるためには、四つの大きな落とし穴がある、ということをおっしゃっております。その四つの落とし穴というのは、第一は原子力エネルギーです。この原子力エネルギーを平和利用するか、あるいは戦争の道具として使うか、それによって二十一世紀を迎えることはできなくなる、ということ。第二の落とし穴は、人口の増加ということ。彼は今から七、八百年たつと、もう人類は地球上に立っていないやいやられないだろう、座る座席がなくなるくらいに増えるであろう。この人類の増加ということ——人口の増加ということは、食糧問題と結びつくわけです。そこで当然、彼は食糧問題とということの一つの落とし穴として計算している。その食糧という落とし穴につきまして、大変なことになる。それでは人類は食物を今のような食物に依存するのか、別な食物が発見されるのか、それが一つの問題である、ということ。第三が地下資源の問題。何億年前に地下に埋蔵されたものによって、石炭になり石油になっていく。そういうものを惜しげもな

く掘り出してしまつて、その地下資源の枯渇する時に、人類は一つの落とし穴に直面する。今日はすでに石油問題で大騒ぎしている。最後の四つ目の落とし穴というのは、「人間の資源」の問題ということでありませう。

花園大学学長 大森曹玄先生

近代文明は人間の把握を誤っていないか
（バーナード・フィリップス、シュペンゲラー、ゲオルグウの説）

私は禅宗の学校として、大学として、その人間の資質の問題を問題とし、教育として人間の資質の問題を問題とし、教育としております。それは近代文明というものが、今から四百年前に起こつたところの近代文明というものが、そもそも人間の把握のし方を間違えてやしないか、私ども禅の立場から、そう思わざるを得ない。

それは、フィラデルフィア大学の哲学教授で、バーナード・フィリップスという人が、そういうことを言っております。バーナード・フィリップスには、『普遍的宗教としての禅』という

著述があります。彼が普遍的宗教としての禅という場合に、禅をどういう意味で期待しているのか。それは近代文明を転換するための基本的実在感として、禅のもつ実在感だけが近代文明を転換する実在感として力がある、ということと言っているわけです。近代文明のささげるところの実在感というものは、単独の個というものを肯定して、人間を単独の個として認めている。これがそもそも大間違いである。ヨーロッパ文明というものが、そういう実在感を根底としていくかぎり、いつか近い時に終局が生ずる。

それについてはすでに第一次大戦の後、シュペンGLERという人が、『西洋の没落』ということを書いておられます。その頃、私は、まだ少年時代でありました。中学生でありましたが、シュペンGLERの『西洋の没落』を解らないながら、かじりついて読んだものです。

今度、この間の大戦のあと、ゲオルギウという人が、『二十五時』という小説を書いておられます。これはみなさんもきつとお読みになったでしょう。つまり、人類の文明というものは、二十五時にはいった。再び暁を迎えることのない、滅びる時間にはいつてしまった。そこで彼は、そのところどころでこういうことを書いています。今はひとり（一人）と呼べるような人間はこの地上には、いなくなつた。番号で一号、二号、三号と呼ぶか、一個、二個、三個と呼ぶか、

要するに、今は人間はいなくなつた。機械と動物との混血児であるところの「市民」という生物の一種類がいるだけだ。人間はもういなかった。そのために文明は、「二十五時」に入つたと書いていくわけです。

そして、これは必然的にそうなるということ、彼は確信をもつて書いていくわけではありませんが、最後の方にわずかに、もし「二十五時」に陥つた世界が、再び暁を迎える可能性があるかと仮にするならば、それはアジア地帯におけるところの農村から、再び太陽が昇ることがあるかも知れない、と書いてるだけです。必ず東洋の農村から暁の昇ることを、必然的にそうなるということ、彼は書いていくわけではありません。

「人間の資質」は両親から、遠く二六五四九に〇を三十二つつけた数のいのち（生命）の大親から来ている

このように大きな戦争のあるたびにその後で人間というものが顧みられ、人間というものが批判され、それをどうするか、どう把握すべきかということが課題になるわけです。今のポールディング氏は、過去の戦争ではありませんけれども、新しい二十世紀を迎える時に、最後の問題として、「人間の資質」というもの——これを問題にしているわけです。これは日本人

あるいは東洋人として考える場合には、極めて簡単に単純に考えることができるわけです。

ごく幼稚な説明の仕方ですけれども、あなたがたはいったいどこから出てきたか考えてご覧なさい。私どもの少年の頃、母親が腕白小僧の私を叱る時に、「おまえは私の子ではない。木の股から湧いた子だ」と、こういつて叱りました。しかし、我々は、木の股から生まれたものは、一人もいないはずで、必ず両親から生まれている。私一人あなたがた一人を、この世に送るためには、二人の母親、父親が要ります。その二人の父親、母親はどこから生まれてきたか。やはり四人の父親・母親から生まれてきているわけです。その四人の父親・母親は、どこからきたか、八人の父親・母親から生まれてきている。このように、私一人というものが生まれてきた元をたずねて行くと、等比級数的に親の数が増えて行きます。私はそういうことを極めて常識的に考えて、いったい三千年をさかのぼつたらどのくらいになるだろうか。日本の歴史は三千年に始まったという。この一人が二人から生まれ、二人は四人から生まれ、逆算して等比級数的に増えていく親の数は、三千年たつたらいくらになるか。

これを、ある数学者が私のために計算してくれました。それはどういう計算をしたかという、人間の一代を二十五年と仮に定める。三千

を二十五で割ると、一二〇になります。そうすると、一が二になり、二が四になり、四が八になり、八が十六になるといふように、等比級数の倍加率で、百二十回これをくり返して行くと、いくつになるか。二六五四九という数字に、〇を三十二つだけの数になる。これは専門の数学家が計算してくれたんだから、間違いないでしょう。等比級数の表を見れば、当たらずといえども遠からず、という数字が解るでしょう。二六五四九に〇を三十二つける。それはいったい何と呼ぶべきか。何兆というのか、何と呼ぶのか私は知りませんけれども、とにかく無限大の数になるわけです。それだけの命の数が、私どもの中にあるんだということです。

これが東洋における昔からの個人の考え方です。東洋では、儒教でも仏教でも道教でも、そういう計算の仕方をしておりません。かりに儒教では、それを「天」と言っております。「天、人を生ず」。我々禅のほうでは、「仏」と言っている。つまり無限の命を「仏」と呼び「天」と呼ぶ。神道家は「神」と呼ぶでしょう。今の生命科学者は、「生態系」と呼ぶ。呼び名は何でもかまわない。符牒だから「神」と呼ぼうと「生態系」と呼ぼうと、「仏」と呼ぼうと、「宇宙生命」と言おうと、「根元的な命」と言おうと、何と言おうとかまわなければ、我々は原始の生命にまでさかのぼることができる。

それを、ルネサンス以後の計算の仕方は、チヨキンと切ってしまつて、この単独の個だけを実在の基盤として、そこで計算を始めている。これは近代文明というもの、これがそもそも間違いです。

「和敬」ということ

あなたがここで起居されるこの塾は、和敬塾と言われる。「和敬」ということは、単独の個人では意味をなしません。単独の個人として、一体「和」するものが何があるのか。「敬」するものがどこにあるのか。これは複数の人間の集団でなければ、「和敬」という原理は意味をなさない。そういうところで、あなたがたは起居されている。「和」という字は、ご承知のように、禾（のぎへん）に口を書きます。「のぎ」は、稲の意味です。「和する」ということは、稲を口にもつていく時に、始めて「やわらぎ」の心がおこる。「和する」という気持ちがおこる。こういうことでしょう。人がよく宴会をやる。宴会ということは、必ずしも酒が飲みたいから、ご馳走が食いたいからということであるわけではないでしょう。人と仲良くなりたい。打ち解けて、本当に心から解け合つためには、食物を口にもつていく時に一番心が和らぐ。そこでお互いに、和らぎ睦み合つために、稲を口へ持つていくわけでしょう。文字の成立から、

そうなっている。

そして「和して同ずる」ということは、聖徳太子も戒しめている。「和して同ずる」。それは、「ずる和同」という。「和する」という反面に、「敬する」という気持ちがあつて、始めて、人間の交渉となるわけで、「敬する」は、「つつしむ」「うやまう」という意味の文字です。相手と「和する」けれども、ただの「ずる和同」ではなくて、お互いに相手の人格、相手の本質を尊敬しうやまう、自ら慎しむ。そういうことから「和敬」という言葉がでるわけでしょう。その「和敬塾」という塾で学ぶ皆さん方は、自分という存在は、単独の個ではないんだ、無限の命につながっているんだ、そのつながっているところの無限の命という根底においては、すべての人が同じ立場を持つんだ——そういう気持ちが必要にならないはずで、禅では、そういう自己の根元をはつきりと掴むために、禅という、座禅という修行をするわけですね。

近い頃では、ヨーロッパ大戦の終わった後、エーブナーとか、ブーバーとかいう人々が、何故こういう戦争を人類がしたのかと、これを反省した事実があります。そして、エーブナーやブーバーは、これは人間というものを考える場合に、知的な存在だとして把握したが、それが間違いだ。上野の美術館に行くと、庭にロダンの「考える人」というのが飾つてあります。あ

れがルネサンス以後の近代人の把握の仕方でしょう。「人間とは考える存在」と。しかし、エーブナーやブーバーは、考えるということとは、単独の個人で出来る。相手は要らない。これがおのずから個人主義になるんだ、単独の個人を實在の根底として考える、その考え方が個人主義になるんだ、個人主義はやがて利己主義につながるんだ、これが戦争の原因である。彼らはこういうふうに、そういう単純な、短絡的な言い方ではありませぬけれども、哲学的にはあるけれども、要するにそういうふうに彼等は発想しております。

そこで、エーブナーやブーバーは、人間というものは話す存在だと、コミュニケーションをする存在だと。話すということは一人ではできない、相手がなければできない。しかも相手は、自分と同じ次元に立つものでなければ、本当のコミュニケーションということではできない。そこで彼らは「我となんじ」としての人間関係というものを打ちだしました。これは我々はあの学生時代に盛んにブーバーの『我と汝』という本を読みましたが、今私の大学の構内にある本屋の店先に広告が出ていましたから、今うちの学生も読むんだと見えます。

その「我と汝としての人間関係」という共通の立場、地盤に立って、そしてコミュニケーションをする、そういう人間関係でなければ、「和

敬」ということは行なわれないはずである。和敬ということが行なわれるためには、そういう基盤が必要である。私はこのように考えます。こういう人間観をはつきりとかむということとは私はポールディングのいう人間の資質が一つの問題で落とし穴であるという場合に、今申しあげたような、エーブナーやブーバーの言ったような「我と汝としての人間関係」あるいは生命の根源においては、みな共通の地盤につながるんだという人間観、そういうものをはつきりつかまなければ和敬は成立しない。和敬は成り立たない。私はこう考えます。

ヨーロッパ禅講演、書・剣道等実演行脚

一 そのきっかけはレゲットさんの

二度の来訪がもたらしたもの

さて、私は昨年、八月から九月にかけてヨーロッパをまわりました。この起りは、今から何年前かに、ロンドンのテレビ局BBCの日本語部長でトレバー・レゲットという人がおりました。そのレゲットさんが、ある日いきなり電話をかけてまいりました。自分はイギリス人でレゲットというものだけでも、あなたに会いたい。何日に会えるか、というから、それでは何日にお目にかかりましょうと申しあげたら、君のところに行くには、どういうふうに行ったらいいか目標を教えてくださいというから、一応説

明しました。そしてあまり日本語がうまいもんですから、日本人の通訳だと思って、あなたが案内してくれるんでしょうね、と言ったら、いや、ぼくは本人だと言うから、随分日本語のうまい人だなあと思いました。

やがて、約束の時間に、その人が参りました。その人はわたしの玄関をはいる時に、腰を折り曲げるようにしてはいつてきました。私は思わず見上げて、あなたは随分背が高い人ですねえと言いましたら、彼は六尺二寸だと答えました。私は六尺二寸という数字に驚いたのではないのです。恐らく私が今あなたがたに、君は随分背が高いけど、どのくらいというと、一メートルいくらというでしょう。ところがこのイギリス人は、尺貫法で答え、六尺二寸、一メートルいくらと言わなかった。二メートルいくらとも言わなかった。

そして、彼がはいってくるときに、ひよっとみたら、日本字で書いた背表紙の本を三冊もつてはいった。下の二冊が私の書いた本でした。一番上の本は、三島由紀夫の書いた『葉隠入門』でした。あなたは『葉隠』を読んでいるんですかと聞いたら、今これを研究中だという。それから、彼がいきなり話しました。これは実におどろくべきことを言いました。彼は座敷に上がると、雑談しているうちに、自分は日本人では宮本武蔵を一番高く評価する、とこう言い

ました。これも私は、度肝をぬかれてびっくりしました。

私の剣道の先生は、山田次郎吉といまして、商科大学、今の一橋大学の剣道教師で、一橋大学がこの人をどうしても離さなかった。亡くなるまで商科大学では山田先生を教授として迎えておりました。その先生に『日本剣道史』という著書があります。しかしその私の先生は、宮本武蔵を高く評価しておりません。宮本武蔵は、田舎廻りの剣術家ばかりを相手にして、勝った勝ったと言っているけれども、江戸に来て、柳生家は將軍のご指南番だからこれは試合ができないとしても、町の剣道家に男谷下総守でも誰でも偉いのがいたじゃないか、井上伝兵衛でもいたじゃないか。そういうものは訪ねていない。そうして田舎まわりの剣術家たちを相手にして、勝った勝ったとほらをふいていた。こう言つて、この宮本武蔵を評価していない。

私はこれは、私の先生の少し言い過ぎだと思ふ。そりや武蔵が自分で『五輪書』の中に、適当に書いてます。自分は十四歳の時に秋山某と戦つて、これを一撃に倒した。それ以来、二十九に至るまで真剣勝負を六十回やった。全部勝つた。しかし、勝つ道理があつて勝つたという覚えはない。僥倖にして勝つた。つまりまぐれあたりで勝つた。相手がその時に腹が痛かつたか、あるいは相手のいる位置が、場所が悪かつ

たというか、その僥倖にして勝つた。勝つべき道理があつて勝つたという自覚はない。そこで、年三十歳の頃から一生懸命「道」を修めて、五十歳のときに初めて道というものをつかんだ。道というものをつかんだら、それ以後は筆をもてば書ける、絵がかけられる、のびをもてば彫刻ができる、槌をもてば鑄工ができる、何でも支障なくしてできた。こう書いてるわけです。

そこで私は、レゲットさんに、あなたが宮本武蔵を日本の代表的人物として尊敬されるのは、どういうことですかと聞いたら、彼は日本文化の特徴を最もよく表現していると、こう言いました。そこで、びっくりして、それでは日本文化の特徴とは、一体なんですかと、こうききました。レゲットさんは、こう言いました。ヨーロッパの文化は、みんなが孤立している。音楽は音楽だけ、絵画は絵画だけ、彫刻は彫刻だけ、文学は文学だけ、みんな各文化が孤立している。孤立しているために、将にヨーロッパの文化は崩壊しようとしている。日本の文化は、すべてのものが「道」という原理によつて支えられていてではないか。こう言つて、宮本武蔵はその道によつて道を体得したら、何でもできた、こう言つてる。これが日本文化の特徴を最もよく表現している。そこで自分はこれを一番尊敬すると。

ところで、と彼は言葉をあらためて、日本は、

我々ヨーロッパの文化のお陰で、今日のように発達してきたではないか。恩恵を受けたヨーロッパの文化が孤立しているために、崩壊しようとしている、倒れようとしている。潰れようとしている時に、何故道の原理というものをひつさげてヨーロッパの文化を救わないのか。それが日本人としてのヨーロッパに対する恩返しではないか、彼はこう言いました。そこで、私は、あなたは道、道とおっしゃるけれども、私は禅によつてヨーロッパの文化を救済しようと思つております。こう言つたら、あさうですか、と言つて、そこで別れました。

二、三か月たつてから、彼は今度は黙つてうちにやつてまいりました。その時には、天井につかえそうな大男を十三人も連れてきて、君の剣道のやるところを写真に、映画にとる。だからここで撮らしてくれと。我々のちっぽけな道場の中に十三人も天井まで届くような大男を連れてきて、カメラを持ちこんで写真を撮りました。その揚句、今度は字を書くところを撮る。字を書くのには、床の間の前で書け、それを撮る。わざわざ床の間の前へ行つて字を書いた。字はどうも読めないから、丸をかけ、円相を書け。円相を書きました、十五枚ぐらい書かされました。またその映画がヨーロッパ全土に放送されました。

アメリカにもなんか放送されたとみえて、日

本にきて座禅をやっていたアメリカの女性から手紙がきて、こう書いてました。あるとき、チャンネルをひねったら、いきなりあなたの顔がポーツと出てきた。私は思わず頭が狂ったと思つて、頭を抱えて半日のたうった。アメリカにあなたの顔がポーツと出てくるわけがない。これは、自分の頭が狂ったんだと思つてのたうった。しかし、後でいろいろ聞いてみたら、確かにあなたの剣道やるところが映ったと。だから、レゲットさんに聞いたら、アメリカではニュースとして報道されたでしょうと。ヨーロッパ各地で放送された。

二 準備——計画・団体構成・実演分担

そこでここにいる寺山（且中）さんと、それならば木剣と筆をもつてヨーロッパをひとつ廻ろうじゃないか、テレビでみたものを実演してみせようじゃないか。ひとつ興業師としてヨーロッパの各地を興業して廻ろうと言いました。そうしたら、上智大学の教授・門脇佳吉という文学博士、工学博士の神父さんと、私のところに来て座禅をやっている人が、それは面白いから、私どものほうで計画をたてますというので、バチカンの枢機卿に知り合いがあったのでここに交渉しました。そしてたちまちドイツを中心にして、現地まで委員会ができてしまいました。それでどうぞ木剣と筆をもつて回って

下さい、ということでした。

ところがバチカンのほうから注文が出まして、我々が日本の禅及び禅文化を歓迎するだけでは一方通行だ。我々としては、禅の文化であるところの墨跡・絵画・武道・茶道、そういうものを研究する。その代わり日本から来た人達は、修道生活を体験してもらいたい、という条件が向こうから出ました。そのために禅文化研究所あるいは花園大学の教授達全関係者を五十名ばかり募りまして、八月と九月、ヨーロッパ各地を回って参りました。

三 現地での実演・遭逢・見聞等

私と寺山さんは、いつでも剣道の型をやる。それから目の前で墨跡を書いて見せる。裏千家の千坂秀学というのがやはり花園大の出身者で、彼がお手前をやってみせる。鎌倉の続燈庵の須原耕雲という和尚は巻藁射礼をやりました。そういうことで、ヨーロッパ各地を歩きました。そしてこちらから行ったものは、ある修道院に二十日間、ある修道院には半月というふうに修道生活を体験し、むこうの希望において座禅の仕方を教える、ということをして、交流をしまりました。まあ非常にこのヨーロッパでは、歓迎されました。

私はその一番最初、禅および禅文化ということについて講演しました。ヨーロッパの講演と

いうのは、原稿を持たないといけないというんですね。これは主としてドイツでしたが、講演をする場合には、原稿を持ってくれ、原稿をもたない講演というのは無責任だ。ちゃんと原稿に書いてあるということでもって、それが確実なもんだ、いい加減な放言にならないという証明になるんだということで、フォン・フェンさんという東京に十年以上もいて座禅をやり武道をやった人がおりました、彼が私が日本語で書いたものをドイツ語訳して、私はその元のものをも日本語で読みました。原稿をもつて読むだけだからこう読みますと、それをフェンさんがドイツ語で放送する、そういう講演の仕方、ずっと禅及び禅文化ということ、ならびに私が剣道と書道、それからケルンの文化館で寺山さんが百五十点の禅画と墨跡をもつて展覧しました。

これは非常な盛会でした。文化館始まって以来の大繁盛であった。持って行った墨跡類を、ドイツ語の注釈つきで厚いパンフレットを作りました。日本で作つたら何千円という書物になると思いますが、向こうでも二千円ぐらいで売つたらいいんですが、これは初日に全部売り切れてしまった。増版また増版で四版重ね、会期も延長また延長で、随分延長した、それほど大繁盛であった。それから私どもの書いた漢字がドイツの人に読めるだろうかと思つて

けれども、不思議にそれを頒けてくれ、頒けてくれと言うんです。

私は、自分の書いたものなら差し上げてもいいと言ったら、ドイツ人というものはがっちりしていますね、ただやると不公平になる、ただあげるならば全員に行き渡らなければ、不公平になる。だから墨跡を欲しいという人には上げる、上げる代わりに、インドの難民救済の義捐金をひとつお願いします、というので、箱の中にお金を入れて貰うということにしたという。どうぞご自由にといいことで、やりました。後にお金はお金はバチカンを通じてマザー・テレサさんに送ったということです。

私のところに、今年になつてからですが、マザー・テレサさんから手紙がやってきました。なんで私にマザー・テレサから手紙がくるんだらうかと思つてあけて読みましたら、民族を超え宗教を超えてインドの難民のために援助して下さったことを感謝いたします、と、丁寧な感謝状と、中に受け取りがあるんです。受け取りは何ていうか、私は金の勘定がうまくできませんのでわかりませんが、六桁の数字が書いてあった。これはいったいいくらぐらいになるのかと、門脇神父さんに聞いたら、約百万でしょう、九十何万という金でしょうと。まあそれだけのお金がケルンで書いたものだけで喜捨されたわけです。まあそういうふうなことで、

ヨーロッパでは禪を非常に歓迎しております。

アムステルダムで会った二十五歳の 剣道学生——のち来日

そして特に、これはおもしろいことは、こういう若い方がおられるならば、私は手紙を持つて来ればよかつたけど、アムステルダムに行つたときに、私と寺山さんと二人で教会堂で剣道の型をやりました。私どものやる型は、直心影流の法定の組太刀をやつて段を降りましたら、そこに十人ばかりの青年がかたまつておりました。それがこう言いました。——我々はアムステルダムの剣道連盟のものです。今日は先生が日本からいらつしやつて、我々のために武道を見せていただいて、まことにありがとうございます。いささか敬意を表しますと、日本手ぬぐいを呉れた。日本手ぬぐいをちゃんと包みに包んで、赤いのしを印刷してあるものです。で私はすぐに、この手ぬぐいを拝見していいですかと言つたら、どうぞと言ひ、あけてみましたら「心武剣」と書いてありました。心の武の剣と書いてありました。それをありがとうと頂いてきました。

そのとき一番若い学生がこう言いました。——私は先生のところに剣道を教えて頂きに参りますけれども、宜しゅうございますか。花園大学に学生として置いて頂けますか、と言うの

で、ああ、いらつしやい。君はどこにいるの、と言つたら、アムステルダム国立大学の日本学部大学院の学生です。幾つときいたら、二十五歳。私は九月の末に日本に帰りまして、十月になるまで大学にまいりませんでした。十月の十日ごろになつて、大学にまいりましたら、受付にそのアムステルダムの学生の名刺が置いてある。この男もう来たの、九月の末にまいりました。どこに行った、と言つたら、先生がいないならば、旅行してくると言つて、何か別府に行つて来ると言つてたから、別府にでも行つたんでしようという。言っているうちに、戻つてまいりました。私は、君はどこへ行つて来たかと聞いたら、大阪までぶらつと行つて、大阪から船に乗つて別府へ行つて来た。別府へ行つて温泉へはいつてきた。いいご身分だねえ、今夜僕のところ泊るんだらうと言つたら、いや都ホテルに泊つてると。へえ、贅沢だね。おぼさん連れてきてますから、都ホテルに泊つていいという。そういうことでその晩うちへまいりました。そしたら彼がこう言いました。私は小さいときから空手と剣術をやつていました。ひとかどのものと思つていました。ところが今度先生の演武を観たら、先生のおやりになるのは剣道だ、わたしのやつているのは剣術だった。わたしのはただの技術に過ぎなかつた。先生のは剣道だつたと。君は「道」と「術」の区別が

解るのかと聞いたたら、それは解ります。それは専門に修業したのだから解ります。どう解るのと突っこんだら、解説をしておりました。それから逆に向こうからわたしの書いた字はどうでしたかと言うから、君はいくつ、二十五です。二十五にしては上出来だ。誰に習ったの。アムステルダムに謡を教えている日本の女性がおります。その人に習いました。二十五歳であのくらの字が書けたら上等だ。出来すぎている。ませてるんだな、と言いました。

この男が正月に年賀状を呉れました。その年賀状なのですが、「頌春」と書いてあった。いま頌春という言葉は若い人は年賀状に使いませんね。私はよく「頌春」と書きます。春をたたえる。彼は便箋のあたりに頌春と書いた。そして大森曹玄先生、自分の名前を書いて、それから文章が書いてあります。その文章がまたこれ問題なんです。——わたしは生来短気で、よく人と争うことがあります。これを何とかして今年中に克服したいと思ひます。今年中には、せめて木鶏の境地に百万分の一でもよいから近寄りたいと思ひます、一生懸命努力するつもりです。その境地に近寄るために適切な公案があったら、それをお授け下さい——という手紙だった。どうでしょうか、いま学生諸君は、「木鶏」という言葉をおそらくご存知ないと思ひます。木鶏とは、木の「にわとり」と書く。これ

は中国の烈子に出ている言葉で、荘子にも一箇所使つてある。日本では、最近では二葉山という相撲がこの木鶏の境地というものを非常に憧れて、そこをねらつて修業をしていた。

二葉山に、ご承知のように『二葉山求道録』という本があります。相撲さんが道を求める二葉山求道録、私はこれをすぐ読みました。そうすると彼は安岡先生から木鶏ということをお教えられて、自分は木鶏の境地を学ぶということで一生懸命やつた。そして彼はこう書いています。——自分は、人が受けて立つ相撲だといふけれども、わたしの体力で受けて立つ体力はない。こんなことをしたら、負けてしまふ。しかも彼は生まれながらにして、左の眼が見えない。それを絶対人に言わなかつた。両目が見えるような顔をして、相撲をとつていた。自分の相撲は受けて立つんでなくて、相手の声で立つんだ。だから、いつでも仕切り、最初から立つ覚悟で立つた。第一回目でも相手が立てば立つた。決して待つたをしなかつた。立つた時には、すでに先手をとつた。それが私の相撲だ。こう書いてある。これを木鶏の境地でできたと言ふんです。アムステルダムの二十五歳の青年学生がそういうものを読んでいる。

ドイツから来た十六歳の剣道娘

また、これはいつかドイツ人の親子で私のと

ころへ来た話であります。その子どものほうは十六歳の娘でしたが、私に剣道を教えて呉れというから、教えてもいいけど防具をどうするのと聞いたら、防具を背負つて来てる。どこから背負つてきた。ベルリンから担いできました。ベルリンで剣道をやっているのと言つたら、ベルリンの大学で大学生がやっています。私はそれを一つ貰つて担いできました。それならば教えよう。そうして話しているうちに、ひよつと彼女のハンドバックの中をのぞいたら、『老子』という本を持っている。それがひよつとみたら、上海本なんです。で、わたしが、あんたはラオツを読むの、といつたら、読みます。読んでご覧。はい、といつて、出してシナ音でペラペラと読みました。そこで意味はどういうふうにして理解するの？ 私は老子の大家だから教えてやろうかと言つたら、意味はこつちでみます。赤い本を持っていた。これはドイツで発行された本で、老子を講釈した本があるんですね。それを持っています。

これが十六歳の少女ですよ。十六歳の少女は上海本の無点の老子を読んで、しかもそれをシナ音であたまから読める。ドイツ語の本を見てそれで意味を理解している。こういうことをやっている。私はそのときに、日本敗れたり、と思ひました。ドイツにしてやられたなあ、と思ひました。

ミュンヘンの祭りの鼓笛隊

今度ミュンヘンに行ったときに、再びそう思いました。ミュンヘンはちょうどビール祭りで、もうホテルがいっぱい、我々泊まる場所がありませんでした。それで友人のアパートに転がりこんで、そこで十日ばかり居候しました。ミュンヘン祭りを見に行きました。ちょうど今日ぐらいの雨が降っている時で、雨の中二時間ぐらい立って見ておりました。あれは、周辺の村落から鼓笛隊が出てきて、行列して歩きます。その鼓笛隊の太鼓を打つ音の物凄さ、それからラッパを吹きますけれども、ラッパを吹く吹き方の物凄さ、ちょうど聞いてみると、ただの鼓笛隊でなくて、進軍ラッパのような、突撃の太鼓のような打ち方をしている。ドイツはもう一度戦争するつもりかな、と思ったら、果たせるかな、彼らはこう言ったそうです。我々の仲間で行ったものに対して、我々はこの前はイタリイのようなへなちよこと組んだために、負けた。今度は我々は日本と組むんだ。こう言ったと。えらい勢いでまた戦争を惹き起こすのかと思いましたが、十六歳の少女が日本にまできて老子を読んでいる。驚くべきものだと思います。

われわれが単なる個人ではなく、その資質

は遙か遠祖から伝わった宇宙的存在であることの自覚——新しい文明創造の実

在 観

まあ余分なことばかり申しましたけれども、最初申しました二六五四九に〇を三十二付け足す数だけの、それだけの命が我々の中に含まれている。その上にご互いが立っているんだ。決して、この単純な個人ではない、ということ、是非みなさんがたは若いうちからはつきりと自覚をもって下さい。

私の大学は、それを専門にやっております。みんなが若い青年たちが、一生懸命やっております。今は外国の人が非常に盛んに禅をやりますから、至る所に来ております。我々の学校にも聴講生が来ております。わたしの道場にもいつも三人ばかり泊りこんでいます。ポルディングの言う四つの落とし穴の最後の「人間の資質」というものが問題だということ、彼は詳しくは書いておりませんが、資質といえは生まれながらの性質だと思えます。生まれながらの性質というよりは、ヨーロッパの人間というものの把握のしかた、それが単独の個として掴んでいるところに問題があるのではないか。これはエープナーやブーバーがすでに指摘している通りであると思えます。

そういう意味で、我々は宇宙間に存在する、そういう存在である。我々の中には、具体的に

見ることはできないにしても、二六五四九に〇を三十付けただけの無数の生命が含まれているんだ。我々はそれを踏まえて、ここに個として生きているんだという自覚というものを持つということ、私は必要ではないかと思う。それが新しい文明を創造する実在観として基盤になるんだ。これはバーナード・フライリップス氏ばかりでなくて、多くの先覚的な学者が言っておるところであります。

これが、また観念論ではなく、事実だということ。もしも、我々の祖父母でもいい、祖父母でも現実に我々の生をうけた祖父母ではない他のものが、若し入れ替わっているとしたら、今日の私はないはず。過去のものは、動かすべからざる既定の事実です。そういうものを幾つか踏まえて、私というものは、ここに現われている。これは既存の事実、既定の事実、過去の事実、そういうものを踏まえて、ここに「我あり」ということができる。そこで、そういう自覚をもった我々が、どういう生き方をしていくのか。

ランケの歴史観

これは歴史のことですけど、ランケという歴史学者がおります。あのランケが『世界史概観』——これはババリアかどこかの国王に対して世界史を説明したのが『世界史概観』とい

う書物になっております。——その中の序説のところ、彼の歴史観がちよつと出ているので、ランケはこう言っております。——各時代は、みな神に直接する。その時代というものは、そこから派生するものの内容が、何であるかということによって価値づけられるものではない。その時代そのものが神に直接するんだ、こういうことが書いてある。これはマルクスの唯物史観とは違うわけです。ランケの歴史は、各時代は神に直接する、そういう所にあるわけです。

これを個人の歴史に当てはめるならば、各瞬間は、神に直接すると言ひ換えていいでしょう。一刻一刻、我ありという一刻一刻、すべてそれは神に直接するんだ。そこから派生するものが何であるかということによって、価値づけられるものではない。我々が生きて、かくあるということ、そのあるという一瞬が神に直接するんだ。「神」ということは、「絶対」と改めていいでしょう。それで絶対的意義をもつんだ。我々は、このランケの歴史を京都で、朝日奨学会という学生の集まりに行つて、よくこれを話します。

朝日奨学会・中外日報——

そこでの安原実の場合

朝日新聞奨学会というのは、朝日新聞の配達

をする学生に入学金や生活費を給する制度である、これで勉強しているものがだいぶ居ります。ところで私の花園大学に、安原実という男がおりまして、これは母一人、子一人の家庭で、朝日新聞配達をしながら生活をしています。学校では、私が教えた男です。これがある学生仲間機関誌に書いた文章があります。

さて、京都に『中外日報』という、四ページの小さな新聞ですけれども、宗教界では非常に権威のある新聞があります。昔、真溪涙骨という人がその社長でした。真溪氏が生きている頃は、彼が誰かを賞めると、その人が一躍有名になつてくる。あいつはだめだ、怪しからん、と一応書かれると、没落する。そのくらい、権威をもつた新聞でして、その真溪涙骨の亡き後に、吉田留次郎という社長がおりまして、彼が今申しました安原実が学生仲間のもに書いた文章を見まして、今時の大学生でこういう生きた文章を書けることを見たのは初めてだ。この男にぜひ会いたいものだ、というので、彼が会いました。そうしたら、目の前で、一つこういうことを、こういう題で書いてみるという、彼を書きました。

そうしたら、その吉田社長は、これは珍らしい学生だ。こういう生きた文章を書ける学生というのはいない。俺の社に入つてくれ。それは来年卒業の前の年の十月でした。彼はそれを山

田無文に話したら、馬鹿を言え、おまえは大学を続けるのだ。それが初心ではなかったのか、と強くたしなめられた。

彼は迷いました。そこで私は、君は折角文章を書く専門の人から、君の文章は生きていると言われた。文章で立て。君は宗教を浄化しろ。そうすれば、雲水になつて山田無文の所へ行くよりは、社会的な意義がある。それをやれと申しましたら、彼はその通りしました。そうなる、前の年の十月から社に出勤しろということ、彼は朝晩新聞配達をしながら新聞社へ行って、原稿を書きました。そうして、翌年、今度は新学期にならないと、新しい学生は新聞社に入つて来ません。彼はもう記者になつているんだから、本当は新聞配達をやめて、その『中外日報』に勤めていればいいんですけども、それは今まで自分が学生時代に助けて頂いたこの店の店主に申しわけがない。自分は後輩ができて、後輩が完全に新聞配達をできるまで見届ける。それまで自分は配達するといつて、朝晩は新聞社のほかに新聞配達をしておりまして。私はそれは徹底的にやれと申しましたら、翌年の四月までやりました。今、彼は立派な新聞記者になつております。

朝日奨学会での臨濟禪の講演

その彼とは別ですけれども、朝日奨学会とい

う所に毎年私は講師として呼ばれて行くんです。その時はいつも言うんですけども、今のランケの、各時代は神に直接する。君達は新聞配達している時は、新聞配達君達の生活だ。それをやる所かにはいけないぞ。安原という男が居た。これを見たまえ。彼はそういうふうにして最後まで新聞配達をした。そのために新聞社からも信用されて、今では立派な「人生ジャーナル」という一面全部を担当している。『中外日報』という小さな新聞社ではあるけれども、そこでは大きな存在となっている。

そういうものだから、決してこれは自分が勉強するための仮の手段だというふうなことで、調子をおろしちや駄目だ。一瞬一瞬を本当に生きる時、それは神に直接するという生き方ではないか。そういう生き方をせずにあいだを疎抜（おろぬ）いたら、自分の意志はどうなるんだ。人間というものは、過去は過ぎて今はない。未来は未だ来らず、まだない。あるのは、今だけだ。その今は刻々に流動して、少しも停滞していない。ちょうど幾何学上の点のようなもので位置のみあって実態なしというのが、今という瞬間だ。その瞬間はランケの言うように神に直接する。今ここという所は、自分の絶対に生きる場所だ。今ここ、今ここ、今ここ、今ここ、不連続の連続で、その点のような所を充実して生きる。それが人生というものだ。これが禅の

生き方だ。

私どもは禅のうちでも臨濟禅ですけど、臨濟禪師は「ソツコンモクゼンチヨウホウテイ（即今目前聴法底）」と言って、今ここで私の話をきくそのものは何か、それを追求しろ。それを追求したら、今ここ、今ここ、今ここ、とそこを完全に充実しろ。それを「随所に主と為る」という。随所に主と為るといふのはいつでもふんぞりかえって威張っていることではない。いつでも自分の主体性を失わないこととだ。主体性を失わないということは、バイブルの言葉でいうならば、「人もし汝の右の頬を打つならば、左の頬をいだすべし。人もし汝の上着を奪わば、下着を差しだすべし。人もし汝に一里の道を行く事を求むれば、二里の道を行くべし」これが「随所に主と為る」という禅の生き方だ。こう言いました。

**片頬を打たれて逃げる説教者は
基督の教えを弱者の道とする者**

私が初めて道場を持ちましたのは、三十一の時、小石川の水道端に道場を持ちました。そこで主として拓大の学生を養成していました。ある時、道場で剣の稽古をしている時、そのまま私はちよつと玄関の方へ参りましたら、そして、耶蘇のキリスト教の方の救世軍という軍人のような格好をした人がおりまして、私の家の

塾生をつかまえて説教していました。立ち止まって聞いたら、今の「人もし汝の右の頬を打たば、左の頬をいだすべし」とそう言っていました。

そこで私はぎよつとしました。あんたはそれができますか。もちろんです。と言うので、いきなりびしゃつと頬を打ちました。打ったら眼鏡が飛んだ。そうしたら彼が慌てて、こうやって眼鏡を探していました。眼鏡をつかむやいなや、彼は後ろも見ずに逃げて行きました。私は、大きな声で、「左の頬を忘れたか」と言ったら、左の頬を出さどころか、逃げだしました。

つまりこのクリスチャンの人達は折角のキリストの教えを弱者の道としてしまった。キリストは弱者じゃない。強者だ。あの山上の垂訓を見ても、「何を食らい何を飲まんとて思いわずらおうや、さらば空の鳥を見よ、紡がずして着、耕さずして食うている。いわんや人間たる者は、何で生活のことに思い煩うのか」、キリストはそういうふうな強者である。

**「随所に主と為る」ということ——
臨濟禪の世界**

あの「汝の右の頬を打たば、左の頬をいだすべし」ということは、私は禅でいえば随所に主となる、つまり最初は打たれる。むこうが主で、こつちが客です。むこうが打っている時、こつち

ちは打たれている。ところがその立場をさっと変えて、さあこちらを打ちなさい。こちらを存分にお打ち下さいとだす時は、こちらが主体で、こちらが打たしてやっている。むこうは打たしてもらっている。つまり受身の立場を積極的に主の立場に切り換える。それがその刹那にできているわけでして、そういう意味で、キリストという人は実に偉い人だ。

禅宗の坊さんに、こういう話があります。ある坊さんが箱根の山を夜越えしました。山賊に襲われ、おまえ着てる物をおいてけといわれ、結局は着ている物を全部はがされました。どうせ坊主の着てる物だから、ろくな物ではないでしょう。全部ぬぎました。そして、その上、その坊さんが、おおこれはいらぬのかと、ふんどしをとって、これもついでにどうだ、あげるよ、と言ったら、向こうが驚いて、そういう物はいらないよ。それだけはもってけよ、折角あげよと言ったのに、という話があります。

そういうところで、主客の立場を換える、これがそういう相手が人間でなくても、自然でも、運命でも、何でもいい、何でもいければいい、自分が受け身の立場を取ったとき、さらっと立場を換えて、自分が積極・主体性を失なわないようにして、さっと切り換える。その切り換えが、すべての時代の神に直接する絶対の生活だと、ランケの歴史哲学は、そういうことになる

んだ、と私は思います。

臨済の生き方はそれです。どんな苦境に立っても、山中鹿之助じゃなければいけません、なお、この上に労難、困難もかまわない、やってこい。彼は常に三日月の眉庇(まびさし)つけて、『憂きことのおおこの上に積れかし、限りある身の力試さん』そのようにして自分の力をためすために、環境に対して主体性を失なわない。これを臨済が随所に主と為るといふことを言っているわけです。

二つの願い

まあ、だいた長つたらしくなりましたけれども、私が、以上申し上げましたことを要約すれば――みなさん方は、二六五四九に〇を三二つけただけの過去の生命を内に含んでいるんだ。そういう単独の個ではないんだ。多勢と人とながっているところの個なんだ。禅的個なんだ。全体を抱擁しているところの個なんだ。言い換えれば、宇宙的存在なんだ。こういう自覚をもつて下さい。そういう本質をもった我というのは、生きるときにはいつでも、今という瞬間にあらゆる時間を吸収してしまう。今ということに世界中を個に集結してしまう。そして今ここというときにおいて、自分の全能力を發揮して生きていく。これは、随所に主と為るといふ臨済禅の教えの生き方だ。その命の本質と、

それを生きているところの現実の生きる態度、この二つのことを申し上げたいと思つたんです。あちこち、ゆるゆるしましたけれども、それを窮めることによって、最初申しました「人間の資質」という、二〇世紀を乗り越えるための一つの生涯、落とし穴というものを乗り越えることが出来るだろう。私は、そのように思います。

今日は、この皆さん方の、和敬塾の、二十五周年記念、この意味深いときに、若い皆さんに話をさせていただいて、私は光栄に思います。ご清聴ありがとうございました。(拍手)

※当DVD収録のご講演録には、現在では不適切と思われる表現が用いられている場合がございますが、講演時の時代背景等を尊重し、当時のままといたしました。